

平成 28 年度全国・東京都・荒川区学力調査に関する結果分析シート (様式 2)

学校名 荒川区立第三中学校

調査名	分 析	実施結果 (正答率)	
区 学 力 調 査 全 学 年	5教科全てで区の正答率を大きく上回った。 【国語】学年によって正答率に差が見られる。説明文読解、作文や漢字の読み書き、文法や語句に関する知識量不足と定着させる指導が課題である。 【社会】「社会的事象に関する知識・理解」「日本の地域構成」について知識・理解を深めていくことが課題。 【数学】基礎 77.3%に対し、活用は 71.4%と活用問題の数量を式で表すことや活用の立式が課題である。 【理科】学習内容がよく定着している。資料等による間接的な学習が苦手である。主に化学領域の問題の正答率が低い。観察・実験の技能の習得が必要である。 【英語】リスニングの正答率が高いのはスピーキング中心の活動に重点を置いていることが要因と考える。また、聞く・話す活動と読む活動の関連を考えると「長文の読み取り」がもう少し高いことが望ましい。	区	自 校
		1 年 国 63.9 社 47.0 数 67.3 理 57.3 英 61.8 2 年 国 71.8 社 51.1 数 59.5 理 44.9 英 64.1 3 年 国 64.7 社 50.2 数 56.5 理 46.9 英 58.9	1 年 国 70.4 社 56.0 数 76.1 理 64.6 英 70.2 2 年 国 75.5 社 58.0 数 65.8 理 50.7 英 72.7 3 年 国 66.3 社 57.1 数 66.0 理 49.4 英 62.2
都 学 力 調 査 中 2	本校 2 年生と東京都の正答率を比較すると全教科において上回っていた。国語においては、やや二極分化の傾向が見られる。社会では、「読み解く力に関する内容」の観点で「読み取る力」が約 6 ポイント上回る結果となっており、その他の観点でも平均率を上回る結果となった。数学では、都平均よりも上回ったが、「思考・判断・表現」は、都平均より低い部分がある。理科においては、学んだこと、知識、情報を必要に応じて取り出し、課題を的確に読み取り、解決できるように一層授業を改善していく必要がある。英語では、音声重視した授業を行ってきたため「読み取る力」において都の正解率を 13.7%も上回った。	都	自 校
		2 年 国語 71.1 社会 57.8 数学 56.7 理科 55.2 英語 55.6	2 年 国語 72.8 社会 58.7 数学 59.0 理科 59.9 英語 60.5
全 国 学 力 調 査 中 3	国語、数学ともに全国平均を上回る結果となった。さらに向上させるために課題も発見できた。 【国語 A】主として知識の問題では、文脈に即して漢字を正しく書くこと・読むことが中では低くなっている。【国語 B】では、文章の展開に即して内容を理解する問は上回っているが、目的に応じて必要な情報を読み取るような文章の構成や表現の仕方は弱い。 【数学 A】「教科の内容」においての観点別正答率では、「関心・意欲・態度」「技能」「知識・理解」では都平均よりも上回ったが、「思考・判断・表現」では都平均を 8.2%下回った。数学 B 「読み解く力に関する内容」においては、「取り出す力」「読み取る力」「解決する力」はいずれも都平均を上回った。	全 国	自 校
		3 年 国語 A 75.6 国語 B 66.5 数学 A 62.2 数学 B 44.1	3 年 国語 A 76.6 国語 B 69.3 数学 A 65.7 数学 B 51.3

＜平成 29 年度の具体的方策＞

《国語》

【1 学年】

漢字の読み書きの力が少し低いように感じる。国語の基礎・基本的な力をつけさせた上で、その能力を活用できるよう授業の目標や目的を発展的な内容へと少しずつシフトしていく。今後、弱点になるであろう漢字の読み書きや文法に関しても重点的に指導していく。

【2 学年】

「書く」「言語事項」を克服できた。特に、「書く」については飛躍的な向上が見られた。漢字の読み書きについては平均を上回っているが、まだまだ安心できない範疇なので、今後も練習を積み重ねていく必要がある。説明文の読解が平均をわずかに下回り、それが唯一の弱点といえるので、接続語、指示語、段落構成などの学習を重点に、学力向上に努めていく必要がある。

【3 学年】

文章の展開に即して読んだり、情報の収集に関しては大きく上回っているのは、1 学年からの積み重ねが大きな向上へと結びついたと考えられる。読み取った情報を活用し、根拠をもって主張したり、活用したりする能力が低い。そのため、学校図書館やタブレット PC であるテーマに関して調べ情報を集めることはできるが、その情報を活用し主張文を書くなど、その情報を活用することが弱い。学校図書館活用やタブレット PC の活用に関して、調べて終わりではなく、そのあとの目的を明確にしていく。

《社会》

社会的事象への関心・意欲・態度を高める方策として、電子黒板やタブレット PC などの ICT 機器を活用や図書館を活用した図書資料を使った授業を行っていく。ICT 機器の活用の具体的な方法としては、複数の資料を提示するなどの視覚化をすることで、興味や理解を高めていく。また、発表の道具としてタブレット PC にまとめ、それを全体に共有するといった活動を行っていく。さらに、個人の活動としてタブレット PC を活用し調べる活動を行っていく。次々に生まれる疑問をすぐに調べ解決することで、いろいろな社会的事象に興味をもってもらう活動を実践していく。図書資料の活用に関しては、生徒が疑問に思ったことを調べまとめる活動を通じて、関心・意欲・態度を高める取り組みを行っていく。生徒に「なぜ？」という疑問をぶつけることで、思考の深化に努める。深い知識を得ることで、社会科に対する関心・意欲・態度の向上に努めていく。

社会的な思考・判断・表現を高める方策として、ある事象が起こる理由を考え、その考えをワークシートに表現するといった活動などを通して、生徒が主体的に考える場面を意図的に設定する。特に、社会科はさまざまな資料を使った授業展開をすることが多いので、資料の読み取りから、その読み取った内容を表現する活動を取り入れていくことで、さらに能力の高まりが望めると思う。

資料活用の技能を高める取り組みとして、思考・判断・表現力を高める取り組みに近いが、授業やテストなどで資料の読み取りを行う機会を多く設けていく。その際に、個人で解決する場面とグループで解決する場面を設けていくことで、さまざまな難易度の資料読み取りを行っていく。また、複数の資料を用意し、比較するなどの取り組みを通じて、資料活用の技能を高めていく。

最後に、本校の生徒の課題としてあげられる社会的事象についての知識・理解を高めるための取り組みは、小テストを実施していく。実施時期としては単元ごととし、学習の整理を頻繁に行うことで、知識の定着を目指す。また、知識の定着という観点から、知識を活用し問題解決を目指すといった取り組みを行う。その際にアクティブ・ラーニングを行うことで知識の定着を図る。

どの観点においても、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れることで、能力の高まりを目指す。年間指導計画や単元指導計画を練り直し、どの時期に知識を植え付け、どの時期にアクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践をすれば効果的かを考えながら授業改善につなげていく。

《数学》

- ・理解が不十分な単元については、小学校の内容も含め年間を通して系統性を考えた指導を行う。授業の初めにこれまでの復習（学び直し）を取り入れることで知識の定着を図る。
- ・電子黒板やタブレットPCなどICTを活用し、視覚的な効果を取り入れ効率的な知識の定着を図り、授業を進める。
- ・授業は計算の手順や法則、公式の必要性などを大切にし、答えだけでなく、なぜそのように導かれたかといった思考の過程をことばや記述で表現させる。また、生徒同士の学び合いや教え合いなどの活動を多く取り入れ、求められている能力の育成を図る。

《理科》

汐入小、汐入東小の両校とも、観察・実験を丁寧に行っているため、理科の学習について、定着度はかなり高い。タブレットPCの扱いに慣れており、パワーポイントなどを使用して発表資料をつくる作業もかなり円滑に進めることが出来る。

一方で、科学的な言葉を用いての説明や発表、直接体験を伴わない抽象的思考はあまり得意でないという傾向が見られる。中学校理科では、事象の数式化やモデルを用いた抽象的思考が増加するので、それらに対する苦手意識を極力減らし、前向きに取り組ませることが重要となる。

【1年】

単元1の植物では観察を中心に丁寧に学習を行いながら、中学校の授業の進め方に慣れさせたい。その後、学習進度に沿って、数式の導入やモデルによる思考を扱うが、出来るだけ平易な問題から入り、計算の複雑さや条件の煩雑さによる混乱を避ける。最も重要な考え方を基礎として定着させた上で、応用・発展的内容として難易度の高い問題を扱う。これにより、基礎学力の定着を図ると同時に、発展的内容への学習意欲の衰退を防ぎたい。また、いくつかの場面では、グループでの調べ学習や話し合い活動を行い、互いの意見を伝えあうことで思考が深まることを経験させる。

【2年】

改善策として、器具の正しい使い方を繰り返し経験させることなどで定着させる。また単なる検証実験とするのではなく、アクティブ・ラーニングを取り入れ、実験操作の意味や実験自体の目的について考える機会を多く設けることも今後の授業改善の視点として考えられる。

基礎的な内容について学び、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業改善をすることで、その知識を活用することや、自分の考えをまとめること、他者の考えと自分の考えを比較したり、合わせてみたりする経験を増やすことができる。3観点の対策として考えられる。

【3年】

現在、2年生は基礎的な知識は持っているが、その知識を活用して思考を深めることが苦手である。ゆえに、生徒の好奇心を刺激するような題材を用意し、積極的な思考活動を誘発できるよう場面設定をする。また、科学的言語を用いた表現力や、相互の意見交換による思考力の高まりを期待して課題解決的なグループワークを行う。受験対応としては、授業内に入試問題に即した演習の時間を設け、学力を向上させると同時に、受験に対する意識を3年生の初期段階から持たせるよう工夫する。

《英語》

○語彙力や表現力のさらなる向上に向けて、ディクテーション活動やピクチャーデスクリビング等の活動を継続していく。

○語彙に敏感で自立的学習者を育てるために、辞書指導をする。

○表現力の強化のために、パフォーマンステストを定期的に継続していく。

○習熟度別コースをやめ、ペアリーダーの存在する少人数コース分けを実施する。

○Authenticな（本物の）題材を提供する活動の一環として洋書の多読を取り入れ、日本語を介さないリーディング力を養う。